

学科の学びを活用する能動的学修の展開 ～今金町美利河地区の地域課題を焦点に～

I 研究概要

1 研究の目的

本学と地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町は、肥沃な土壌や気候の恩恵を受け農業が盛んで日本一の「今金男爵」をはじめ多くの農産物を生産している。また、「日本一のきれいな川」として、その清らかさを誇っている後志利別川などの美しい自然環境や、ピリカ遺跡などの歴史的に価値ある場所も数多く残されている。しかし、同町の美利河地区は、奥ピリカ温泉やスキー場の閉鎖など、地域資源を十分に活用することができず、地域の再生が重要な課題となっている。そこで、本プロジェクトは、同町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決策を、次代を担う今金町の子供たちと協議し、提案を行うことを目的とする。学科の学習を生かすことができるように、キーワードとリンクする学科から学生を選抜し、ファシリテーターとして子供たちの学びの支援にあたる。こうした活動により、学内での学びを生かした学外での能動的学修（アクティブ・ラーニング）展開の方法についての資料を得ることを目的とする。

2 推進体制

本研究は、札幌国際大学と今金町の共同研究であることから、それぞれ以下の推進体制で進める。

《 札幌国際大学 》

■健康チーム（スポーツ指導学科学生 3名） 担当教員 新井貢、本多理紗

・高齢化の進展する今金町において、美利河地区を活用した町民の健康増進方策を検討する

■歴史チーム（現代文化学科学生 3名） 担当教員 坂梨夏代、越田賢一郎

・美利河地区が有する歴史・文化的な資源を、保護・活用および伝承するとともに、今金町における歴史文化の発信を考える。

■観光チーム（観光ビジネス学科学生 4名） 担当教員 丹治和典、千葉里美

・北海道新幹線の延伸は、道南エリアの観光振興に大きな期待が寄せられている。観光客誘致および交流人口を増やすための玄関口となる美利河地区における総合的な観光振興ツールを考える。

□調整チーム（スポーツビジネス学科学生 4名） 担当教員 佐久間章

・チーム間の連絡調整及び活動の記録等。

《 今金町 》 まちづくり推進課 課長 寺崎康史 課長補佐 早坂靖

企画政策グループ主事 植村亜耶 地域おこし協力隊 木元希

3 調査研究スケジュール

第1回合同フィールドワーク

7月16-17日 第1回 美利河地区の現状及び問題の把握（今金町）

・テーマ別チーム毎に美利河在住者のガイドによりFW

第2回合同フィールドワーク

9月16-17日 第2回 課題と解決策について協議（今金町）

・テーマ別にグループワーク(提案骨子の作成)

活動成果報告会 11月3-4日 第3回 提案書の作成、プレゼン準備、発表会（今金町）

II 成果と課題 ～調査研究を振り返って～

1 プロジェクトの成果と課題

本学と地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町は、肥沃な土壌や気候の恩恵を受け農業が盛んで日本一の「今金男爵」をはじめ多くの農産物を生産している。また、「日本一のきれいな川」として、その清らかさを誇っている後志利別川などの美しい自然環境や、ピリカ遺跡などの歴史的に価値ある場所も数多く残されている。しかし、同町の美利河地区は、奥ピリカ温泉やスキー場の閉鎖など、地域資源を十分に活用することができず、地域の活性化が課題となっている。そこで、本プロジェクトは、同町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を、次代を担う今金町の子供たちと本学学生が協議し、提案を行うことを目的として実施した。学科の学びを生かすことができるように、キーワードと関連する学科から学生を選抜し、ファシリテーターとして子供たちの学びの支援にあたる(表-1)。こうした活動により、学生が日ごろの学内での学びを生かした学外での能動的学修(アクティブ・ラーニング)展開の方法についての資料を得ることを目的として1年間にわたり取り組みを展開した。なお、参加学生のうち今金町への訪問経験があるのは、わずか3名であり、残りの11名は訪問経験のない学生であった。

(表-1) チームの役割と学生の所属学科

| チーム | 健康チーム | 歴史チーム | 交流チーム | 調整チーム |
|-----|---|--|--|--|
| 役割 | 高齢化の進展する今金町において、美利河地区を活用した町民の健康増進方策を検討する。 | 美利河地区が有する歴史・文化的な資源を、保護・活用および伝承するとともに、今金町における歴史文化の発信を考える。 | 北海道新幹線の延伸は、道南エリアの観光振興に大きな期待が寄せられている。観光客誘致および交流人口を増やすための今金町の玄関口となる美利河地区における総合的な観光振興ツールを考える。 | チーム間の連絡調整及び活動の記録を整理する。プロジェクト全体の運営及びスケジュール管理する。 |
| 学生 | スポーツ指導学科 3名 | 現代文化学科 3名 | 観光ビジネス学科 4名 | スポーツビジネス学科 4名 |

本プロジェクトでは、学生の意識変容等を把握するため、各回の活動前後にできる限りアンケートやレポート等を実施してきた。こうした調査結果から特徴的なデータを中心に、学生の意識等の変容を概観する。

(1) 社会人基礎力の変化

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成され、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している。

本プロジェクトの参加学生に対して、社会人基礎力の変化を確認するため、12の能力要素(表-2)について、段階評定法(5件法)によって事前(7月14日)と事後(11月4日)に2回調査を実施した。

能力要素について事前と事後の変化は、12のすべての要素で増加しており、要素全体の平均は、0.7ポイントの増加であった。要素別にみると、「⑥新しい価値を生み出す力」が1.1ポイント、「⑦自分の意見をわかりやすく伝える力」が1.0ポイントとなっており、大きく増加した能力要素である(表-3)。

チーム別にみると、変化が0.9ポイントで最も大きいのが健康チームと歴史チームであり、次いで交流チームの0.6ポイント、調整チームの0.5ポイントとなっている。能力要素別にみると、歴史チームの「②他人に働きかけ巻き込む力」が2.0ポイントで最も大きく変化している。(表-4)

(表-2) 社会人基礎力 3つの能力と12の能力要素

| 能力 | 能力要素 | 社会人基礎力 | NO |
|---|-------------|--|----|
| 前に踏み出す力（アクション） ～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～ | 主体性 | 物事に進んで取り組む力 | ① |
| | 働きかける力 | 他人に働きかけ巻き込む力 | ② |
| | 実行力 | 目的を設定し確実に行動する力 | ③ |
| 考え抜く力（シンキング） ～疑問を持ち、考え抜く力～ | 課題発見力 | 現状を分析し目的や課題を明らかにする力 | ④ |
| | 計画力 | 課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力 | ⑤ |
| | 創造力 | 新しい価値を生み出す力 | ⑥ |
| チームで働く力（チームワーク） ～多様な人々とともに、目標に向けて協力する力～ | 発信力 | 自分の意見をわかりやすく伝える力 | ⑦ |
| | 傾聴力 | 相手の意見を丁寧に聴く力 | ⑧ |
| | 柔軟性 | 意見の違いや立場の違いを理解する力 | ⑨ |
| | 状況把握力 | 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 | ⑩ |
| | ストレスコントロール力 | ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力 | ⑪ |
| | 規律性 | 社会のルールや人との約束を守る力 | ⑫ |

(表-3) 社会人基礎力(12の能力要素)の変化

| NO | 社会人基礎力 | 事前(A) | 事後(B) | 増減(A-B) |
|----|--|-------|-------|---------|
| ① | 物事に進んで取り組む力 | 2.5 | 1.7 | 0.8 |
| ② | 他人に働きかけ巻き込む力 | 3.0 | 2.3 | 0.7 |
| ③ | 目的を設定し確実に行動する力 | 2.6 | 1.9 | 0.6 |
| ④ | 現状を分析し目的や課題を明らかにする力 | 2.9 | 2.3 | 0.6 |
| ⑤ | 課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力 | 2.6 | 2.2 | 0.5 |
| ⑥ | 新しい価値を生み出す力 | 3.2 | 2.1 | 1.1 |
| ⑦ | 自分の意見をわかりやすく伝える力 | 3.1 | 2.2 | 1.0 |
| ⑧ | 相手の意見を丁寧に聴く力 | 2.1 | 1.5 | 0.5 |
| ⑨ | 意見の違いや立場の違いを理解する力 | 2.2 | 1.7 | 0.5 |
| ⑩ | 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 | 2.4 | 1.8 | 0.7 |
| ⑪ | ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力 | 2.2 | 1.7 | 0.5 |
| ⑫ | 社会のルールや人との約束を守る力 | 1.9 | 1.4 | 0.5 |

(表-4) チーム別社会人基礎力(12の能力要素)の変化

| NO | 社会人基礎力 | 交流チーム | | 健康チーム | | 歴史チーム | | 調整チーム | |
|----|--|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | 事前(A) | 事後(B) | 事前(A) | 事後(B) | 事前(A) | 事後(B) | 事前(A) | 事後(B) |
| ① | 物事に進んで取り組む力 | 2.5 | 2.0 | 2.3 | 1.0 | 2.7 | 1.7 | 2.5 | 1.8 |
| ② | 他人に働きかけ巻き込む力 | 2.5 | 2.5 | 2.7 | 1.5 | 4.0 | 2.0 | 3.0 | 2.8 |
| ③ | 目的を設定し確実に行動する力 | 2.8 | 2.0 | 2.3 | 1.5 | 2.7 | 2.0 | 2.5 | 2.0 |
| ④ | 現状を分析し目的や課題を明らかにする力 | 3.5 | 2.8 | 2.0 | 1.5 | 3.7 | 2.7 | 2.5 | 2.0 |
| ⑤ | 課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力 | 3.3 | 2.8 | 2.3 | 1.0 | 2.7 | 2.3 | 2.3 | 2.0 |
| ⑥ | 新しい価値を生み出す力 | 3.5 | 1.8 | 3.0 | 2.0 | 3.7 | 2.0 | 2.8 | 2.5 |
| ⑦ | 自分の意見をわかりやすく伝える力 | 3.0 | 2.3 | 3.3 | 2.0 | 3.3 | 2.0 | 3.0 | 2.3 |
| ⑧ | 相手の意見を丁寧に聴く力 | 2.0 | 1.5 | 1.7 | 1.0 | 2.7 | 1.7 | 2.0 | 1.8 |
| ⑨ | 意見の違いや立場の違いを理解する力 | 2.3 | 1.8 | 2.0 | 1.5 | 2.3 | 1.7 | 2.3 | 1.8 |
| ⑩ | 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 | 2.5 | 1.8 | 2.3 | 1.5 | 2.7 | 2.0 | 2.3 | 1.8 |
| ⑪ | ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力 | 2.3 | 2.3 | 2.3 | 1.0 | 2.3 | 1.7 | 2.0 | 1.5 |
| ⑫ | 社会のルールや人との約束を守る力 | 2.5 | 1.8 | 2.0 | 1.0 | 1.7 | 1.3 | 1.5 | 1.3 |

(2) 大学での学びの活用

大学での学びの活用状況について、9月17日の第2回と11月4日の第3回において、参加学生へ調査を実施した。第2回では、活用することができたという回答が36%であるのに対して、第3回では、77%となっている。また、活かすことのできた内容については、プロジェクト演習をはじめとする演習科目におけるグループでのワークやディスカッション、パワーポイントの作成などが挙げられていた。また、科目名としては、前出の「プロジェクト演習」や「観光事業論」「スポーツ社会学」「地域社会と健康」「レクリエーション実技」「基礎演習」が挙げられていた。

(3) プロジェクトの成果と課題

前述の学生調査からも、一定程度の大学での学びが活用されていることを確認することができた。また、社会人基礎力の能力要素についても、事前に比して事後は、12のすべての要素で増加していることを確認した。このような結果に繋がった要因について、本プロジェクトの活動から考えてみたい。

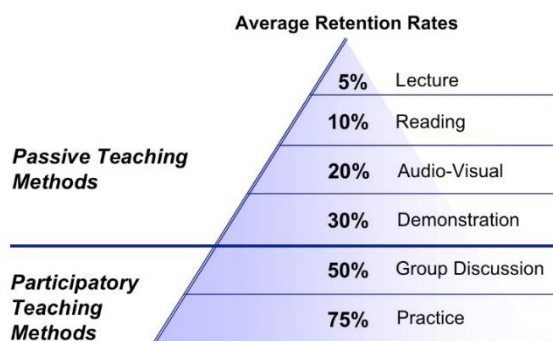
①中学生との共同活動

本プロジェクトは、今金町の中学生と学生が協議し、地域の活性化方策を提案する活動である。特に、学生には、中学生のアイデアを具体化するためのファシリテーターとしての役割を強く求めた。こうした活動が、日ごろの学内での学びを生かした学外での能動的学修（アクティブ・ラーニング）としての有効性ととも、展開方法について検討するための資料を得ることを目的として、1年間にわたり取り組みを展開した。

アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）が発表した研究結果に、異なる学習方法による学習定着率を表す「ラーニングピラミッド（Learning Pyramid）」がある（図-1）。「講義・聞く（Lecture）」は5%、「資料や書籍を読むこと（Reading）」は10%、「視聴覚・見る（Audiovisual）」が20%、「実演によるデモンストレーションを見る（Demonstration）」が30%、「グループディスカッション（Discussion Group）」が50%、「実践による経験・体験・練習（Practice Doing）」が75%、「他者に教えること（Teaching Others）」が90%である。より能動的・主体的な学習方法が学習定着率も高く、教育効果が高いことを示している。学習定着率の指標となるラーニングピラミッドでは、他者との関わり合いや、自らの実践経験が豊富になるほどに定着率が高くなるという傾向がみられる。「講義・聞く（Lecture）」から「実演によるデモンストレーションを見る（Demonstration）」までが30%であることから、残りの70%は行動して実践してみることや、他者の存在が重要になることがわかる。

プロジェクトの活動をふりかえると、第1回（7月16～17日）では、美利河地区の現状及び問題の把握をするため、テーマ別チーム毎に美利河在住者のガイドによりフィールドワークを実施した。続く第2回（9月16～17日）では、第1回のフィールドワークで得たデータを踏まえ、課題と解決方策についてテーマ別にグループ協議を行った。そして、第3回（11月3-4日）の成果報告会では、提案書を作成し、プレゼンの準備を行い、「町民文化祭」の中で活動成果を発表した。活動の中心となる学習方法は、主にラーニングピラミッドの「グループディスカッション（50%）」、「実践による経験・体験・練習（75%）」、「他者に教えること（90%）」の3つが中心となっている。

The Learning Pyramid*



(図-1) ラーニングピラミッド

出典：Open educational resources (OER)

とりわけ、中学生との共同活動であったことは、中学生の考えやアイデアをカタチにするファシリテーターとしての役割が求められ、日ごろの大学の授業とは違い、他者（中学生）に教えるという場面が随所に見ることができた。こうした中学生への教えるという活動によって、大学での学びが学生に如何に定着したか否かの検証には至っていないが、大学での学びを活用することができたということは、今後の学習への意欲喚起に繋がるのではないかと期待する。また、学生が大学で学んだこと（インプット）を、他者に教える（アウトプット）という学習方法を展開することができるのは、地域連携を基盤とした学外での取組であること故の成果といえるのではないかと考える。アウトプットの機会を積極的に提供することが、学内での学びの充実のためにも必要なことである。

②現場でのリアルな学び

今金町美利河地区という特定地域をフィールドとして、そこに住む町民の方々から現状や課題を把握し、中学生のアイデアを形にする活動は、多様な世代や多様な価値観を持つ人との関係性を築き、合意形成していく過程に他ならない。

文部科学省の設置するコミュニケーション教育推進会議は、国際化の進展に伴い、多様な価値観を持つ人々と協力、協働しながら社会に貢献することができる創造性豊かな人材を育成することの重要性を踏まえ、子どもたちのコミュニケーション能力の育成を図るための具体的な方策や普及の在り方について議論を行い、平成23年8月に審議経過報告を取りまとめた。この中では、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と捉え、多文化共生時代の21世紀においては、このコミュニケーション能力を育むことが極めて重要であると報告している。また、経団連が企業の大卒等新卒者の採用選考活動を総括することを目的として1997年から実施している「2017年度新卒採用に関するアンケート調査」によると、採用選考にあたって特に重視した点（20項目から上位5つを選択）で最も多かったのは「コミュニケーション能力」で、15年連続で第1位となった。学生にとって必要なこうした能力は、学内の授業で行われる同世代のグループワーク等の協議において、身につけることは至難であると言わざるを得ない。多様な世代や多様な価値観に触れることのできる現場でのリアルな学習機会を提供できることは、地域連携によるプロジェクトの大きな利点と言える。

| | |
|----------------|-------|
| (代表)スポーツビジネス学科 | 佐久間章 |
| 観光ビジネス学科 | 丹治和典 |
| 観光ビジネス学科 | 千葉里美 |
| スポーツ指導学科 | 新井貢 |
| スポーツ指導学科 | 本多理紗 |
| 現代文化学科 | 坂梨夏代 |
| 縄文世界遺産研究室 | 越田賢一郎 |